

第12回日本がん・生殖医療学会 学術集会

O3-06

名古屋国際会議場 2022.2.11-13

乳癌治療前凍結卵子にて5年後出産例を含む、当院における妊孕性温存の現状と成績

*藤岡 聡子¹、井谷 裕紀¹、重田 護¹、福田 愛作¹、森本 義晴² (1. IVF 大阪クリニック、2. HORAC グランフロント大阪クリニック)

2006年から2021年9月までに妊孕性温存相談で当院を受診した女性は未婚48例、既婚42例、計90例であった。そのうち乳がんが48例で全症例の53%を占めた。原疾患の進行により妊孕性温存対象外の症例およびインフォームドコンセント後に原疾患の治療専念を希望した症例28例を除く、62例に妊孕性温存を実施したのでその凍結成績、妊娠予後を報告する。妊孕性温存の内訳は卵子凍結が32例、胚凍結が30例。卵子凍結例の初診時年齢は15歳～41歳、胚凍結症例の初診時年齢28歳～46歳であった。卵子凍結32例のうち癌治療後に融解し体外受精胚移植を行った症例は2例、うち下記1例が妊娠出産に至った。患者は乳がん術後化学療法前に36歳で採卵し6個の成熟卵子を凍結保存。40歳で結婚、凍結卵子をすべて融解し顕微授精後2日目胚2個を自然排卵周期で胚移植し単胎妊娠が成立し41歳で出産、現在余剰分割期胚2個が保存中である。胚凍結30例のうち融解移植したのは10例(22周期)、妊娠例が7例(10周期)、出産例は6例(8周期)、流産例は2例(4周期)、患者あたりの妊娠率は70%、周期あたりの妊娠率は45%であった。米国生殖医学会のガイドラインには1人の児を得るためには15個程度の凍結卵子が必要と示されているが、原疾患治療が優先されるがん治療前の卵子凍結では多数卵子獲得が困難である。しかし、当院での凍結卵子融解後妊娠症例では卵子数6個でも妊娠出産に至り余剰胚も凍結できた。また凍結胚では妊娠率が良好であることから、多数の卵子・胚が獲得できない場合も妊娠出産の可能性は残されている。ただ、卵子凍結では未だ融解使用率は低く、乳がん患者ではホルモン治療が5年～10年と長期にわたる。今後妊孕性温存治療の均てん化、確実な追跡の重要性より新JOFR登録システムの有効な運用が待たれる。